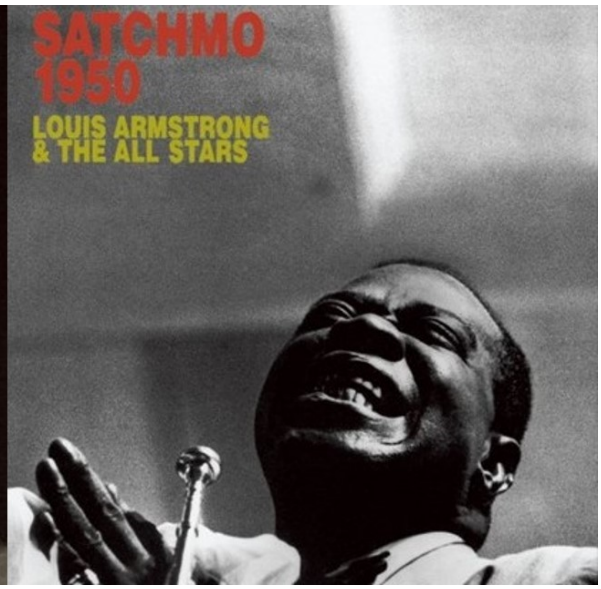

写真は https://www.universal-music.co.jp/louis-armstrong/より引用させて頂いた.

生き

ジャズ♪♫

その素晴らしき世界 上

——外山 喜雄

今から百年前、スペイン風邪が人びとを恐怖と混乱に陥らせた。多数の犠牲者が出たパンデミック（世界的大流行）初年の一九一八年、くしくも登場して流行を乗り越え、二〇年代に花開いたジャズ・エージの立役者が、若き日のルイ・アームストロング（一九〇一～七一年）だった。

アメリカ南部のミシシッピ川河口の港町、ルイジアナ州ニューオーリンズで育ち、音楽に目覚める。だがジャズキングと呼ばれた師匠のキング・オリバーが町一番のバンドだったキッド・オリー楽団をやめてシカゴに行く。その後継ぎに抜てきされたのが、弱冠十七歳のルイ青年だった。

すぐに人気者となり一九年、ミシシッピ川の上流はるかセントポールまで千六百〝を行き来する船「シドニー」のバンドに入り、全米にジャズを広げていった。二二年には、オリバーのシカゴのバンドに呼ばれて活躍し、独自の「ジャズ語」を作るなどジャズ界のけん引車となっていく。

後にサッチモの愛称で親しまれるが、子ども時代のあだ名の一つ、サッチェルマウスに由来する。サッチェルはバスや電車の車掌さんが首にかけて持っていた大きながまぐちの財布のこと。二二年、初めて英国に渡り、港で出迎えた音楽誌の記者が「ハロー、サッチモ」と英国なまりで声をかけたのが始まりという。

とやま・よしお ジャズトランペット奏者。日本ルイ・アームストロング協会会長。1944年東京都生まれ。60年以上ルイ・アームストロングを敬愛し演奏する。68年から5年間、恵子夫人と一緒にニューオーリンズでジャズ武者修行。2018年、同地のジャズ祭で日本人初の「スピリット・オブ・サッチモ・アワード」生涯功労賞を受賞した。

サッチモ「聖者の行進」

歓喜にあふれた葬送歌

大きな口にマスクをしたサッチモの置物（筆者撮影）

サッチモといえば、「聖者の行進」だ。ジャズ発祥の地、ニューオーリンズの黒人社会が生み、サッチモによって世界的に知られた曲だ。「聖者」から想像できるようにジャズは宗教と救いに深い関係を持つ。

ニューオーリンズには今もなお、「ジャズ葬式」の風習が残る。ジャズバンドが賛美歌をすすり泣くように演奏しながら墓場まで葬送行進。遺体が埋められ葬式が終わると、そのリズムは強烈なジャズに変わる。

〝この世の苦しみから解放された！ 天に召されることは悲しむことではなく祝福すること！〟

集まった群衆は手にした帽子や傘を振りかざし、バンドのジャズビートに合わせ踊りながら帰っていくのである。聖者の行進ももとはそんな曲だったのだ。

二十世紀初め、ジャズという新しい音楽の誕生に、スラムの黒人教会は大きく貢献した。牧師のがなり声の説教、黒人たちの掛け声や手拍子、神への深い祈りと強烈な表現、ブルースや労働歌、当時流行のラグタイム、各民族のパレード音楽などが混ざり合い、「ジャズの原型」となった。

一七年には、この黒人音楽にヒントを得た白人バンドによる史上初のジャズレコードが大ヒットし、ジャズが世界に広まるきっかけとなった。その後のジャズの発展と百年の歴史は、サッチモの歩みとも重なる。

代表曲「この素晴らしき世界」が録音されたのは六七年。それから半世紀、コロナ禍の拡大や五月の白人警官による黒人男性の不当な死、トランプ大統領の間違った対応…。サッチモが歌った世界とは正反対の「怒り、恐怖、対立、分断」が際立つ。黒人スラムに生まれ、人種差別をものともせず「ジャズ王」となり、一生を振り返るように「ワッタ・ワンダフルワールド!!」と歌った世界はどこへ行ってしまうのだろう。

スペイン風邪の流行が明けた二〇年代、大恐慌後そして戦後と、「力強くスイング」するジャズは世に光明をもたらし、今も革新的に躍動し続けている。このスイング感の源には、社会の底辺にいてもめっぽう明るかった人たちの宗教観や人生観と、「歓喜の爆発」があるのではないかと思う。ジャズは、サッチモの曲は、百年後も世界中に遍満していることだろう。